

米国におけるスペシャル・エデュケーターの専門性確立の礎

—International Council for Exceptional Childrenの創設に着目して—

教職開発コース 志 茂 こづえ

A Cornerstone for Establishing Special Educators' Professionalism in the U.S.:
Focusing on the Foundation of the International Council for Exceptional Children

Kozue SHIMO

This paper focuses on the foundation of the International Council for Exceptional Children (ICEC) as a cornerstone for establishing the professionalism of special educators' in the U.S. to discuss how the ICEC could help special educators in the 1920s. The six attributes that characterize all professions, which are shown in Lee Shulman's article (1998), were used as rubric for this research.

目 次	引用・参考文献
1 はじめに	1 はじめに
A 研究意図	A 研究意図
B 研究課題と研究方法	本稿は、専門性確立の要素の一つに専門家組織の存在があるという前提に基づき、1922年のInternational Council for Exceptional Children（例外性を有する子どものための国際協会、以下ICEC ^{1),2)} の創設に着目し、米国におけるスペシャル・エデュケーターの専門性確立の礎を検証するものである。
C 用語および表記について	会員、総会や協議会、プロフェッショナル・スタンダード、倫理綱領、機関誌などを有する専門家組織は、専門家が専門家であり続けるために必要不可欠である。ICECは11人の創立会員以外は何も持たずに始まり、上記の全てを備えた現在のCECに成長した。現在ではCECが米国のスペシャル・エデュケーターの専門性を保証していると言って過言ではない。そこでCECの第一歩であるICECの創立がスペシャル・エデュケーターの専門性確立の礎であったという仮説を立てる。
2 先行研究：ICEC創設の背景	一方現在日本では、インクルーシブ教育システム構築に向けて教職員の専門性の確保と向上が求められているが ³⁾ 、その内容は専門知識、技能、免許に集約されており、方法論としては行政主導の研修が推進されている状態である。この専門性は佐藤（2009）が説明する「公共的使命とその実践能力と自律的責任」によって定義される専門職の専門性とは異なる。だがこ
A 歴史的位置	
B 20世紀初めの米国の特殊教育の専門家組織	
C エリザベス E. ファレル	
D 20世紀初めのニューヨーク市	
E CECの誕生	
3 専門性確立	
A エリザベス E. ファレルの専門性	
1 奉仕	
2 理論	
3 実践	
4 判断	
5 経験からの学び	
6 共同体	
7 小括	
B 創立者たちの特性	
1 創立グループの特性	
2 経験と省察の尊重	
4 おわりに	
A 結論	
B 今後の展開	
註	

の違いを日本の特殊教育発展の早遅で論じるべきではないだろう。1879年（明治12年）日本で最初の盲啞院が京都に設立され1872年に頒布された学制の中にはすでに「廃人学校アルベシ」という規定がみられ、その後数校に特別学級が設置されている⁴⁾。義務教育を6年間に改正した1907年には、文部省は各府県師範学校の附属小学校に対し、盲人、啞人、心身不完全な児童のために特別学級をできるだけ設けるよう訓令を出している。むしろその後組織された特殊教育に関する組合や学会などが、CEC初代会長のエリザベス E. ファレルの構想であった「同僚性と専門性を同時に強めながら」直面する課題に取り組み続ける組織⁵⁾とは異なることを論じるべきだろう。そこで本稿では、米国でスペシャル・エデュケーターの専門性を確立するための土台がどのように築かれたのかという観点で ICEC 創設の考察を試みる。

B 研究課題と研究方法

本稿は、ICEC 創設が米国におけるスペシャル・エデュケーターの専門性確立の礎となったという仮説を検証するために、以下の研究課題を検討する。

- 1 ICECの初代会長であり、その目的を打ち出したエリザベス E. ファレルは、専門家共同体を必要とするまで、近代的専門性をどのようにして身に付けてきたのか。
- 2 ICEC創立グループの人々のどのような特性が専門家共同体創設を導いたのか。

課題検討に先立ち、先行研究の検討を通してICEC創設の背景を論じる。20世紀初頭の時代背景とエリザベス E. ファレルというキーパーソンの存在を、ICECの協会目的と関連付けて論じる。

次に、リー・ショーマン（1998）の論文“Theory, Practice, and the Education of Professionals”を手掛かりに研究課題を検討する⁶⁾。課題1は、主に先行研究に示されているファレルに関する評価とCECの機関誌である*Exceptional Children*（以下EC誌）に掲載されたファレルの語りを、ショーマンが検証の際に提唱した全専門家に共通する6つ特性に照らし合わせて検討する。課題2は、EC誌に記録されているファレルを含む11人のICEC創立グループの特性を分析したのち、ショーマンが同論文の中で推論した専門家育成における経験と省察の尊重の困難性の有無を検証する。

C 用語および表記について

日本語では、通常 professional と specialist がとも

に専門家として用いられるが、本研究の専門家は professional を指すものである。

また、資料には一部差別的な用語が含まれていたが、1922年前後は、このような差別用語が日常的に使用されていた時代であったことを考慮し、あえて書き換えないこととした。なお、disabilities等は「障害」と表記する。

2 先行研究：ICEC創設の背景

A 歴史的位置

最初に、先行研究が、1922年のICECの創立をスペシャル・エデュケーションの歴史においてどのように位置づけていたかを確認する。ウッデン（1980, a）はハンディを背負った子どものための学校教育の進歩の途中に位置づけている。米国では最初の聾学校在1817年、最初の盲学校在1829年に設立されているが、ウッデンの説による進歩は1817年の養護施設と寮制学校の設置から始まり、1869年の通学式学級の制定、1900年頃からの州や地方⁷⁾の学校制度の助成金によるハンディを背負った子どもたちへの援助プログラムの開始、半世紀後の急速拡大成長を経て、ウッデンがこの論文を書く5年前にあたる1975年のEducation for All Handicapped Children Act（全障害児教育法）の議会通過⁸⁾までの進歩を指す。

ワーナー（1942）は、ICEC創始時スペシャル・エデュケーションが新分野だったことを強調している。また、ICEC創立を、子どもの分類から教育への転換点として捉え、これにより「まさに実験的な段階にはいった。」と評価する。1905年頃からビネーの知能テストが広まり、1910年にゴダードがビネー・サイモン知能テストを米国向けに翻訳した後も、テストの結果は子どもの教育に生かされず識別や分類に留まっていたことはウッデン（1980, b）が指摘している。

B 20世紀初めの米国の特殊教育の専門家組織

教育者が自ら集まる組織は、1857年にNational Education Association（全美教育協会、以下NEA）が創立されるなど19世紀の後半から形成されるようになっていた⁹⁾。ウッデン（1980, a; 1980, b）は、この時期のスペシャル・エデュケーションの仕事をする人々は教育の主流の外に置かれ孤立していたことから、協議の領域によらない教育者間の密接なつながりを求めていたのにもかかわらず、学際的スペシャル・エデュケーション組織が失敗に終わった要因を分析し

ている。

ヘール (1977) によると最初の試みは1896年ガロデット大学のJ. C. ゴードン博士によるNEAへのスペシャル・エドゥケーション部組織の嘆願である。これは有効嘆願数不足で実現せず、翌1897年、アレクサンダー・グラハム・ベル博士と共に再度提出した署名嘆願書によってNEAの承諾を得た。当部会は1916年、エリザベス E. ファレルが副会長だった時は学校、施設、医療機関、私立機関、州の教育課、大学の代表者ら100人以上が集まり、関心領域別の会合が開かれるほどに成長したが、1918年の総会後に解散した。衰退を辿った理由として、ウッデンやコード (2002) は、資金不足、委員会創立の目的である横断的組織化の失敗、会員間の交流や広報活動の欠如を推論している。さらにウッデンは、この領域に「例外的な子ども」という概念を導入したマクシミリアン P. E. グロズマンが1905年に個人で創立した、「例外的な子どもの研究と教育のための全国協会」が1922年に消滅したことにも言及し、グロズマンが著名人招集に走りすぎ、教育者やその他の専門家からの献身を得られなかった点を指摘している。

C エリザベス E. ファレル

ICEC 創立メンバーの一人で初代会長のエリザベス E. ファレルの功績の研究は多い。ウォルド (1935)¹⁰ は、ファレルの偉業、能力、ポジティブな性質を描いている。ヘンドリックとマクミラン (1989) は、米国のスペシャル・エドゥケーション発展に貢献したニューヨーク市の先進的な取り組みとしてファレルとマックスウェル教育長の尽力を論じている。コード (2002) はファレルの生育的背景、リアン・ウォルドら進歩主義改革者からの影響、ニューヨーク市立学校で始めた混合学年学級などの教育的試みと分離反対の哲学、多角的な査定という斬新な考え方、後継者の育成、専門家を組織する構想、など多面的に生涯を研究し、彼女の信念が後の法改正等で立証されたという特徴的な論調で、ファレルの哲学が現在の米国のインクルージョン教育の基礎となったと主張している。

日本におけるファレルの研究には混合学年学級に関しては本間・米田 (2011)、中村・田代 (1992)、ヴィジティング・ティーチャーズに関しては倉石一郎 (2012) があるが、CECの創立と関連付けているものは管見の限り見当たらない。一方米国においてはフィリップ (1935)、ワーナー (1944)、およびEC誌に記載された記録や声明文が、ファレルなしではCECは存在しなかった可能性を示唆している。

なお、CEC 創立までのファレルの重要事項を、先行研究を参照して表 1 にまとめた。

表 1 : ファレル年表

1870	アイルランド系の長女として誕生
1895	オスウィーゴ師範学校卒業
1899	オネイダにて教師初任
1900	ニューヨーク市第一学校就任
1903	イギリス視察
1906	混合学年学級正式認可、調査官に就任
1909	心理教育クリニック開始 (正式年不明)
1912	ペンシルバニア大学講師、ブルックリン研修学校開始
1913	NYU講師 (~1916)
1915	<i>Ungraded</i> 創刊、コロンビア大学TC講師 (~1935)
1916	NEAの特殊教育部副部長
1917	訪問教師を常勤化
1921	ニューヨーク州相談心理学会創立
1922	ICEC創立、初代会長就任

D 20世紀初めのニューヨーク市

ファレルの偉業の背景としてニューヨーク市を強調しているのはウォルド (1935¹¹; 2004)、コード (2002)、ヘンドリックとマクミラン (1989) である。これら先行研究は、ニューヨーク市の問題を指摘する。1897年のニューヨーク市 (以下NYC) 再構成による人口増加とそれに伴う生徒数の増加、1855年以降の大量の移民による人種のつぼ化、貧困と衛生状態の悪化、ストリートにあふれる多くの不登校児、教師不足。これらの問題に取り組んだNYCは、問題のある子どもに特別な教育を提供する米国で最初の市の一つとなった。これを推進したのは進歩主義者で、特筆すべきはヘンリー・ストリート・セツルメントのリアン・ウォルドとNYC教育長のウィリアム H. マックスウェルである。ファレルの発想が実現に至ったのは彼らの多大な支援によるものであることを上記の先行研究は異口同音に示している。

また、コードおよびヘンドリックとマクミランは知能テストの研究者であるゴダードをファレルとマックスウェルの宿敵として示しているが、ゴダードもニューヨークを研究の場としていた。ゴダードとの議論を通してファレルが知能テストとその後の教育の考え方を強めたというのはコードが指摘する通りである。

コード、ヘンドリックとマクミラン、ワーナー (1944) らが、ファレルの後期の活躍の場としてとらえ

ているNYCの二つの高等教育機関は、教師の専門性を考える上で重要である。ファレルは4年間ニューヨーク大学（以下NYU）で教師の省察に関わる授業を持ち1915年にコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ（以下TC）で最初のスペシャル・エデュケーションのプログラムをリタ・ホリングワースと共に始めた。TCによると、ファレルは学生たちに、いかにしてスペシャル・エデュケーションにおける専門家がアイデアと実践を分かち合うことができるかを説いていた¹²⁾。

E CECの誕生

ウッデン（1980, a）は、ICECは前の二つのスペシャル・エデュケーション組織が消滅した穴を埋めて誕生したと述べている。

ICECが創設された1922年8月10日について、ワーナー（1942）ほかEC誌やCECのホームページに記載されているCECに関する記録が、その日のうちに全員一致でファレルが初代会長に指名され、この協会の目的が文書化されたことを示している。

協会の目標は以下の3つであった。

1. 特殊な子どもの教育的な問題に関心をもつ人々をまとめる
2. 特殊な子どもの識別や分類よりむしろ教育を重視する
3. スペシャル・エデュケーションの分野の教師のためのプロフェッショナル・スタンダードを制定する

協会の目標が立てられた経緯を直接示す先行研究は見当たらないが、推論は可能である。協会の目標は、ファレルや当時のスペシャル・エデュケーターの課題に由来していたと考えられる。この新分野を発展させるために志を同じくする者が互いの問題や実践を分かち合う必要性、人権意識がまだ低い時代において知能テストが子どもを識別し分類することへの危惧から教育が研究される必要性、専門性の高い教師が育成される必要性があったことは明らかである。

3 専門性確立

リー・ショーマン（1998）によれば、「専門家共同体」なくして専門家にはなりえない。これに従えば、CECなくして米国のスペシャル・エデュケーターたちは専門家にはなりえない。本章では、ファレルおよびその創立者たちが自律した学び合いの場としてのICEC設立に至ったことの検証を試みる。

A エリザベス E. ファレルの専門性

ファレルの専門性をショーマンが論文で示した「奉仕」「理論」「実践」「判断」「経験からの学び」「共同体」の6つ専門家の特性を参照して検証する。

1 奉仕

ショーマンは、第一に、専門職の目標は『奉仕』—重要な社会的目的の追求—であることを挙げている。奉仕者としてのファレルは、ジョン H. フィンリーが彼女を評して「最も力のない人が知的にまた身体的に可能な限り豊かに生きるように自分の人生を捧げた人」と刻んだ盾が表している。

ファレルの専門家としての出発点は、欠陥児と言われる少年たちの担任になった際、学校は彼らにほとんど何もしていないと感じ、彼らの教育を受ける権利を保証するという社会的目的を追求したところにある。また、ファレルの特徴は、自己犠牲や利他主義による奉仕者というより、進歩主義的な社会改革者としての奉仕者だった点にある。彼女は「教育」それも「学校教育」を通して人々と社会の幸福のために奉仕するというビジョンを明確に持っていた。彼女の文章や語りがしばしば「学校」を主語におくのはその表れであろう。エドワード E. ソーンダイクは、ファレルは「人生がより幸福になるために学校が存在していることを決して忘れない。」と評している¹³⁾。

ショーマンはさらに、専門家には『道徳的理解』を発展させなければならないと主張する。ファレルの道徳的理解の発展は、ファレルの晩年のスピーチに表われている。「もし、刑務所にいる男女に、この政府が彼らにいてほしいと期待するような教師がいたのなら、その刑務所がいっばいであったかどうか疑問です。」¹⁴⁾。教育の道徳的責任、そして教育者を育成する道徳的責任を感じての言葉であると考えられる。

2 理論

ショーマンは二点目に、専門職における理論を挙げ「専門職は研究と『理論』を参照することで自身の仕事を正当化する。」と述べている。

ファレルはNYCが採用していた理論の枠組みには従わなかった。コード（2002）は、ファレルが就任した当時のNYCの教育は、抽象的に思考する能力を子どもに求めている一方で、教育実践は集団主義的で、結果が理論的枠組みをはみ出した場合は何もしていなかったと分析している。フィリップ（1935）およびコードは、ファレルが代わりに混合学年学級のカリ

キュラムを創造する際に参照した理論はペスタロッチであると「子どもの中で優勢となっている直観に沿って、その子どもが学ぶために役立つようなものを提供し、構造的で欲張りで模倣したがる子どもの本能に訴える。」というファレルの言葉を引用して指摘している。本間と米田は、ペスタロッチのほかにルソー、フレーベル、セガンも参照されたと推論している。

また、ショーマンは理論の問題として、「理論は研究分野の単純化と狭窄を通してそのパワーを獲得する。・・・分野の境界を越えて作用する実用的な問題に対しては、概してそれらは別々の分野の中で作用する。」と論じている。一方ファレルは、心理教育診療所を開設するにあたり四つの異なる領域：心理学、社会福祉、医療、教育の専門家をそろえたことから推測するに、この問題を克服していたように見える。おそらくファレルはこの専門的理論の特質を認めていたからこそ自分の専門領域を拡げず、実用的な問題に対処するために連携し協同する選択をしたのだと考える。

さらにショーマンは、学術的な知識が必要不可欠である学問的な専門家は大学で養成されていることにも触れている。ファレルがスペシャル・エドゥケーター養成のためにブルックリン研修学校に心理学、生理学、メソッドなどの理論を取り入れ、大学院レベルのプログラムを提案したことは、ショーマンの考えに矛盾しない。

3 実践

三点目に挙げた「実践」についてショーマンは、「専門職は究極的にはほぼ『実務』である。・・・専門家実務自体は全ての知識が目指す目的である。」と述べる。

コード(2002)によると、ファレルはNYCの教師として子どもの問題に直面したとき、子どもが必要とする教育を与えるのが正しい教育であるという理論を先に示すよりも、実践による成果を先に示す必要があると考え、自分の学級で実験的実践を始めたという。ショーマンは「知識の主張は実務における価値の究極的な試験に合格しなければならない。」と論じている。ファレルは、「子ども達が興味を持たない勉強以上のことを学校ができることを示さなければならない。」と言っている。すでに学校から離れている子どもに対しては実践を示すしかない。

さらにショーマンは「それが、臨床経験の考え方を全ての専門家養成の中に見出す理由である。」とも述べている。ファレルが実践を重要視していたことは、後継者育成にも表れている。混合学年学級教師採用試

験では、筆記試験の他、実技試験と口頭試問も行っている。そのうちの一つは、実際に混合学年学級を担当させて学級経営能力をみるものだった。また、フィリップ(1935)によると、ファレルの学級は最初混合学級の教師を目指す人たちの訓練の場として使われており、彼女は教師たちに自分の授業を見せることで研修をしていたという。これは、デューイがいうところの徒弟的な養成である。

ショーマンは「典型的には、専門家は一旦実務の現場に到達すると、理論的な準備を振り返りその価値を下げ始める。」と述べるが、ファレルは典型的ではなかったようである。コード(2002)はファレルの英国視察を、自分の実践を磨きあげるためにさらなる理論的知識を求め続けた一例として記述している。理論と実践の二項対立ではないファレルの考え方は、のちに科学と芸術¹⁵⁾という教師に必要な二側面という考えに達していく。

4 判断

ショーマンの指摘する4点目は理論から実践へ向かう過程に存在する不確実性のもとでの判断である。「専門職は、学術界から知識をとり現場にそれを応用するための単純な経路ではない。」「人間の判断とは、理論の普遍性と実践の特異性の間、全般と固有の間、理想と現実の間を交渉し、技術的要素と道徳的要素の両方を取り入れること」だという。そして専門家は、その責任において「学術界の理論的な研究基盤の知識から専門家の仕事に従事するのに必要な実用的臨床的知識に転じるために、変換し、適合させ、統合し、合成し、批判し、発明する」と述べている。

実際、個のニーズを重要視するスペシャル・エドゥケーションほど、この判断を要する教育領域はないかもしれない。ウォルド(1935;2004)が「ある考え」を持っている人としてファレルを紹介されたと書いているが、この「考え」はここでいう「判断」にあたる。カリキュラムを非典型的な子どものニーズに見合うように変えるという考えだ。

ファレルは、子どもが恩恵を受けられる指導と学ぶ場を決定することに道徳的で慎重だった。一般に知能テストが科学的と考えられていた時代に、単一のテストだけで判断しない方が科学的だと批判的に考えた。知能テストを排除するのではなく、子どもの条件に影響を及ぼす様々な因子を書き込むカードを発明し、IQを他の診断結果と統合した。そして学級の構成自体も実年齢、精神年齢、ニーズの強度、性別などの組み合

わせで多様化させ適合を図ったのだ。

5 経験からの学び

ショーマンの指摘する5点目は、実践から理論へむかう過程に存在する「最も手ごわい難題」と表現する「経験からの学び」である。手ごわいのは、期待が裏切られることなしに経験から学ぶことはありえないからである。ファレルにとっての期待の裏切りは、子どもの査定結果と現実の違いであろう。計算も暗唱もできない子どもが読書においては普通以上の能力と興味を示した、いつもぼんやりしている少女が、知的障害が原因ではなく家の助けで疲弊していたせいであった(コード, 2002), 気分障害と言われていた少年が眼鏡で視力矯正をすると激昂が軽減された(ウォルド, 2004)などの事例は子どもの指導の場と方法について再びファレルを悩ませた。

またショーマンは、「専門家は自分自身の行動をどのように省察するかを学ばなければならない。」と、ケース・メソッドのような、後に分析と講評をするための経験をすることができる教育方法を示唆している。ファレルは、ブルックリン研修学校では、それまでの徒弟制的な研修にカンフェランスを加えている。また、混合学年教師を小グループに割り当て、協議、実演、問題検討を行うよう指導した。そしてNYUの講義は、学生が特殊学級を観察する機会を持ち読書、討議、講義に参加する「観察と実践」、特殊学級の原則と実務を扱い、成長、スーパービジョン、分類に関する要因を討議する「特殊学級の構成と経営」、学生が子どものグループを指導し自分の仕事を観察し考察する「指導測定のスタンダード」で構成された。このことは彼女が徒弟的研修から省察の研修へと歩んだことを示している。

ショーマンはさらに「このような知識は、孤立した個人の体験と省察では充分に開発されたり維持されたりはできない・・・専門家は共同体の一員であることを求める。」と論じる。ファレルは、この通りに求めたといえる。NYU講師の3年目には教師たちをつなげようとUngraded誌を創刊し、その翌年は、失敗はするもののNEAの領域拡大とニューヨーク応用心理学会設立を試みている。同年TCのスペシャル・エデュケーション科では共同体の必要性を説いている。ファレルが「経験からの学び」の道を通って共同体の学び合いに至ったことは確実であろう。

6 共同体

ショーマンは最後に、学び合いモニターし合う共同体の一員としての専門家について指摘している。専門職は、本来は公共的で協同的であるというのがショーマンの説である。

前述の通り、ファレルはスペシャル・エデュケーター育成に仕事の重心がかかるようになると、そのつながりを強調し始め、同僚性と専門性を同時に強めながらスペシャル・エデュケーションの分野で直面する課題に取り組み続ける組織を構想していった。

ショーマンは、専門家一人ひとりの責任は、個々の実践家よりも知識を有するプロフェッショナル・スタンダードをもつ共同体の一員であるという前提に基づいて論じる。ファレルはICEC創立当日に「本協会は、この分野で奉仕することを任命される人に高い専門家の適格性を要求する会員資格を支援する」¹⁶⁾としてスペシャル・エデュケーターのためのプロフェッショナル・スタンダードを制定する目標を掲げている。

ショーマンは専門家組織の機能をいくつか説明している。一つは、獲得された知識が論拠となるよう査読を通して審査され、機関誌やその他の学術的伝達の形式を通して共同体員間に配布されることを確実にすることである。ファレルは、創立当日には査読という考え方はなかったようであるが、年次総会で例外的な子どもの訓練に有益であると証明された考えが提示されることや、年報が発行されることを希望するとその日挨拶している。そして「ICECはこの分野の教師に有益なクリアリングハウスとなる。」と予言している。さらに1930年の総会の会長挨拶¹⁷⁾では、ICECの在り方として、多様な種類のカリキュラムや教科単元において必要とされる指導テクニックを開発すること、それが総会などで発表され、そこに出席した人々が持ち帰り、現場での成功や失敗について翌年報告し戻すことに言及している¹⁸⁾。これは創設時の構想より踏み込んだ構想となっている。

ショーマンは、このような獲得、体系化、集積、論評といった過程は、個人の実務と個人の経験の限界を乗り越えることを助けると加えているが、ファレルはさらに、それが「すべての子どもに成功を収める機会をもたらす。」と導いている。ファレルには、「教育の仕事は、教育の科学と芸術において訓練を受けた人によって方向づけられるべき」という信念があり、ICECによってそれが保証されるという確信があったのだろう。ファレルは創立の日に宣言している。「ICEC創立は重要な出来事です。」

ICECは、ショーマンが言う「個人の経験が協同的になり、共有される専門知識が広められ、プロフェッショナル・スタンダードが進化する」専門家共同体を目指したといえる。

7 小括

ここまで、リー・ショーマンの論文を参照し、ファレルの専門性を検証してきた。

ファレルの専門家としての成長は、当時のNYCが選択していた教育理論が通用していない子ども達に直面するところから始まった。学校は何もしていないと思ったファレルに最初に必要だったのは成果を出せる実践だった。ペスタロッチ、ルソー、フレーベルなどの理論を手掛かりに、自分の教室で実験をしていった。この実践が成功し始めると、自分の専門性を高めるため知識を求めた。その後、クリニック開設においては他の専門家との連携と多角的査定を可能にし、知能テストなど科学的理論を詳細に子どもに適合させることに努めた。また後継者の育成では最初は徒弟的実践指導を行うが、後には省察する育成へと変化していった。この頃から専門家同士の交流に関心を持ち始め、その機会を作り出すことに尽力した。そして同じ目的をもった専門家共同体ICEC創立に至る。こうしてファレルの専門性は、ICECの設立によって完成されるのである。

B 創業者たちの特性

1 創立グループの特性

CECが創立された1922年8月10日のニューヨークでの夕食会には、その日初代会長に選出されたエリザベス E. ファレルを含め11人の女性たちが出席していた。実質的に創立に向けた活動は彼女たちによるものだった。彼女たちの資料は、ほとんど残されておらず、希少な資料にワーナーが自らの記憶を加えてEC誌(1942;1944)に発表した論文と、1980年にEC誌がCECの歴史特集を組んだ際にウッデンが創立会員を再調査し発表した論文(1980, b)が現在入手可能で信頼できる資料である。

今回この3本の論文から創業者の特性として分析できる要素を抽出し表2にまとめた。上から5段目までは夕食会の準備に参加した順に記載し、ワーナーらに呼びかけられて出席した6名¹⁹⁾は6段目以降に、苗字のアルファベット順に記載した。

記録からわかる範囲のそれぞれの職務経験は、1922年以降のものも含まれているが、理論と実践の枠

組みを超えて、教職(7)、管理職(9)、スーパーバイザー(5)、研究職(大学または研究所)(7)とちらばっている。学歴は高いだけでなく、継続教育を受け、学び続けている人々であることがわかる。さらに各人とも多様に組織に加入しており、そこで積極的な活動をしていた。一集団として見た場合、関心領域が広く、活動拠点の地理的広がりを持つ多様性を特徴としながら、子ども達のために学びたい、成長したいという目的を一つにしていた集団であると言えるだろう。ICEC創立は、佐藤(2009)の言葉を借りるなら、「学びの専門家」であるスペシャル・エデュケーターたちが学び合いの場を強く求めた結果であろう。

2 経験と省察の尊重

再びショーマンの同論文に戻る。ショーマンは“Dewey's Era”の節の中で、デューイが教職における研究大学や師範学校から実践の共同体への新しい流れを予言していることを認めたくて、デューイがこの論文²⁰⁾発表時の1904年には教師の学習源として、また教育界の研究者側の学習源としての教師の経験に目を瞑っていた理由を推論している。ICECの創業者たちは、ショーマンが1904年を指して示したその困難性には直面しなかったのだろうか。

推論の一つ目として、ショーマンは「教育や心理学の科学者たちに研究を追求できる特別な実験学校があれば、生物学的科学が医学のためにしていることを教育の科学でも行うことができただろう。」と特別な実験学校がなかったことを挙げている。この障壁は、少なくともNYCにおいては当時の教育長のマックスウェルが実験学校を設定するという貢献をしたことで取り除かれている。また、創業者たちの経歴と、スペシャル・エデュケーションが当時新しい領域であったことを考慮すると、彼女たちのうちの何人かは、なんらかの実験的な学校で仕事をしていたことは否定できない。

二つ目としてショーマンは、学級にいる女性は、校長室にいる男性や大学の男性科学者たちに指示される必要があるという当時普及していた男女の役割の考え方について示唆している。実際に、混合学年学級教師は女性のみ募集であった。しかしICECは管理職および研究職を経験している女性の手で、女性の会にならないよう留意しながら始められた。(半年後の第一回総会には男性会員も加わっている。)ヘンドリックとマクミラン(1989)は、マックスウェルが教育委員会ですらトラブルを抱えている一方でファレルは評判を上げ、NYUの職を得、*Ungraded*を出版し、彼が退職

表 2 : 創立メンバーの特徴

なまえ	当時の職業 (SPEDは スペシャル・エデュ ケーション)	当時の ファレル との関係	職務経験				CECへの貢献
			教職	管理職	SV	研究職	
ヘンリエッタ A. ジョンソ ン	CA州オークランドの 職業指導と特殊学級 のSV	TC 夏季講座 の学生	○	○	○		本協会設立の火付け役者, 初代規約と定款委員会委 員長
ラヴィニア・ ワーナー	OH州アテネのオハイ オ大学SPED科科长, 夏季は州立マンハッ タン病院で精神科の ソーシャル・ワー カー	TC 夏季講座 の非公式 の助手		○		○	初代事務総長, 8月22日の夕食会の立案, 企画, 調整, 意思決定
モード・キー ター	CT州ハートフォード の州教育課SPEDの上 級SV, コロンビア大 学TC夏季講習の特殊 学級授業の講師	TCの 同僚	○	○	○	○	8月22日の夕食会合を計 画助言者, 初代決議委員会委員長と して会員の発散的な関心 のまとめ役として活躍
エリザベス E. ファレル	混合学年視察官, TC 講師,		○	○	○	○	初代会長
ヘレン H. ハーモン	NY州ニューヨーク, バンドール島の小児 病院の教育管理官	不明		○	○		8月22日の夕食会合の招 待者の決定, 最終調整を 行った
ジェニー L. ボール	インド, アリーガル 遅れのある少女の学 校MEミッションの最 高責任者	TC 夏季講座 の学生	○	○			本協会は全国的というよ り国際的な範囲であるべ きだと主張した一人
ジェシー B. ドーリング	NY州ニューヨークの 混合学年学級教師, コロンビア大学TCの ホレス・マン附属学 校のデモンストレー ション教師	TCの 同僚	○	○		○	初代副会長
エステラ・ マッカー フィー	MO州カンザス・シ ティのジャクソン・ オポチュニティ学校 校長	TC 夏季講座 の学生		○			初代財務
イモジェン・ パレン	カナダ, オンタリオ 州トロント学校の読 唇術の教師	TC 夏季講座 の学生	○			○	短縮前の組織名「例外的 な子どもの教育のための 国際協会」の提案者
アリス H. ス ミス	MA州ストーンハム の特殊学級のSV	TC 夏季講座 の学生	○		○	○	第一回協会会議における 指名委員会委員長
アリス C. ス ミシック	NJ州モントクレアの 心理学テスト指揮官	不明		○		○	不明

主な組織活動	学歴	備考
女性専門家クラブ会長, オークランドSVクラブ会長, 校長と教師の組織員, 女性管理職クラブ, 麻痺のある子どもの研究組織オークランド・フォーラムの一員	SVの仕事のために州立大学から単位を受けている, サンフランシスコのティーチャーズ・カレッジ文学士号	
米国応用心理学士協会, 米国科学振興協会, 米国心理学会, 米国知的障碍協会, 例外的な子どものための国際協会クリーブランド支部諮問委員会, オハイオ応用心理学協会, オハイオ研究協会, 女性有権者同盟, クリーブランド市女性クラブ, クリーブランドのゾンタ国際ビジネスと専門家女性クラブ, クリーブランド福祉連盟子どもの協会	オハイオ大学理学士号, コロンビア大学で心理学とスペシャル・エドューケーション科学修士号, インディアナ大学臨床心理学博士号, インディアナ州ジェームズ・ウィットコム・ライリー小児病院の心理学クリニックでインターンシップ	
専門家の集まりに積極的	NY州ニュー・プラッツの州立師範学校卒業, コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ理学士号, 文学修士号	スペシャル・エドューケーションの「教育」の概念をまとめた
米国心理学会, ニューヨーク州相談心理学会	オスウィーゴ師範学校卒業, コロンビア大学TC文学士号, NYU理学士号,	
米国歯科協会, 米国女性歯科医師協会, ファイ・カッパ・ファイ, 全国歯科優等協会オムリコン・カッパ・ウプシロン会員	コロンビア大学理学士号, ミシガン大学歯学科	
不明	MI州アルピオンのアルピオンカレッジ文学士号	
ニューヨーク市女性管理職議会秘書, ナタニアル・ウッドヒル支部の防衛委員会委員長, 赤十字活動	ME州ゴーハムの師範学校で小学校教職の訓練, CT州ウィリアマンティックの師範学校で上級教師の訓練, ティーチャーズ・カレッジ理学士号, NJ州ヴァインランド精神薄弱のための研修学校, ハーバード, イギリスケンブリッジ, NY州ブルックリンのアデルフィ大学	
全国小学校校長協会, 教育の女性管理職協会, MO州教師協会の会員	MO州スプリングフィールドの州立ティーチャーズ・カレッジで専門教育, カンザス大学文学士号, 教育の修士号	予てからスペシャル・エドューケーションの専門家組織の創立を呼びかけていた
不明	トロント大学で教育の学位, コロンビア大学TC, セント・ルイス聾のための中央研究所	通学式特殊学級設立に貢献
マサチューセッツ公教育SVの会創立会員/終身会員, 全国教育ボストン歴史的家系学会, NEA, マサチューセッツ教師連盟, ストーンハム教師クラブ, マサチューセッツ市民連盟, マサチューセッツ精神保健会, ボストン市女性クラブ	MA州セーラム州立大学, ハーバード, ボストン大学, コロンビア大学	特殊学級の卒業生の社会的監視の必要性を研究
不明	コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ教育学士号,	夕食会で積極的な発言をした

する頃からTCで講座を持つようになったことに触れている。ファレルは1913年以降男性の指揮下から出てリーダーとしての頭角を現していたのである。加えてショーマンは「基本的には教室での指導の技術的仕事は師範学校で教育を受けた女性たち、科学的活動は大学の男性たちの手中におこうとしていた」と推測しているが、ICECが生まれた場は大学、偶然にもデュールの後の研究の場となったコロンビア大学TCであった。

ショーマンの理論に従えば、実験学校の存在とジェンダー意識の変化は、教師の学習経験を尊重することにつながりうる。学習経験を尊重する専門家は自身の経験からの学びを個々に尊重するだけでなく専門家共同体内で省察することを求める。ICECの創立者たちも同様だったと考える。

4 おわりに

A 結論

本稿は、米国におけるスペシャル・エデュケーターの専門性確立の礎としてのICEC創設に焦点を当て、リー・ショーマンが示した専門家の6つの特徴を手掛かりに、ICEC創設の背景、エリザベス E. ファレルの専門性、創立グループの特性を検証した。

協会が目指す3つの目的は、初代ICECの会長ファレルが直面していた3大課題であった。すなわち1)この領域の発展のために一人ひとりの理論と実践、知識とスキルを精査し合い、学び合い、高め合う必要性、2)学校は子どもの学びと生活の質を高めるべきだという社会的使命の遂行、3)専門家としてのスペシャル・エデュケーターの育成、である。

本研究がたてた課題からは、以下の結論を導き出すことができた。

ファレルは、当時の教育理論が通用しない現場に臨み、社会的目的をもって実践を始めた。実践を進展させるために、また後継者を育てるためには、観察したことを共有し、経験を省察し、それらをさらに理論化する必要があった。自分自身の専門性に不足感を感じると、他の理論や実践から学んだが、それは彼女の倫理観に基づく判断で、適合、批判、変換された。ファレルは倫理的使命感としての「奉仕」を基盤に「理論」「判断」「実践」「省察」を螺旋状に発展させる中で、成長し合う専門家「共同体」を求めるようになった。このことから、ICEC初代会長であるファレルの専門性は、ICECの設立によって完成されたといえる。

ICECの創立計画者たちは、理論と実践をつなぐのに十分な多様な学歴とキャリアを有していただけでなく、その多くが多様な組織においても積極的な活動家であった。また彼女達は、ショーマンが1904年を指して憂慮した教師の学習源である経験を尊重しがたい状況にはいなかった。ICEC創立は、専門家として学び合う場を強く求めた結果と言える。

導き出されたこれらのことは、ICECが公共的使命の責任を持ち、理論と実践を判断と省察で結びながら成長し合うスペシャル・エデュケーターを支える礎となったことを示している。

B 今後の展開

創設後ICECは、組織を固め、例外性を有する子どもたちの学習権利を確保するために重要法律の制定や改正に積極的に関与していった一方で、自身の目標の一つであるプロフェッショナル・スタンダードに着手したのは約40年後であり、スペシャル・エデュケーター養成への影響力を大きくしていったのはさらにその後になった。この間のCECの歴史を通じて、CECが専門家としてのスペシャル・エデュケーターの確固たる自律基盤となるまでを今後さらに深く検証していく必要がある。

また本研究の結果は、特別支援教育教師の専門家組織が日本に存在しないことに対する新たな仮説を構築するにはいたっていない。しかしながら、行政主導や研究学会以外での特別支援教育に携わる教師が自ら育ち合う環境の創造は、今後検討すべき課題であろう。

註

- 1) 現在のCouncil for Exceptional Children。本稿では、1958年の改名以前をICEC、以後をCECと記す。
- 2) 「exceptional: 例外的な」という言葉は1900年頃Maximilian P. E. Groszmannが最初に用いたと言われる。
- 3) 文部科学省 2012. 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm.
- 4) 1890年長野県松本尋常小学校に「落第生学級」、1896年長野県長野尋常小学校に「晩熟生学級」、1897年群馬県館林尋常小学校に学業不振児のための学級、1905年大阪府師範学校附属小学校に「教育治療室」が設置されている。
- 5) Kode, K. の著書 *Elizabeth Farrell and the History of Special Education*, 2002. の出版時にCEC事務局長のSafer, D. N.が寄せたまえがき
- 6) ショーマンのこの論文は一般的な教師の教育、特に理論と実践間の連結を概念化するために、徒弟制と実験室との違いを明

- 確にして書かれた“The Relation of Theory to Practice in Education” (Dewey, 1904) の中に示されたジョン・デューイの当時の教師教育の観点を検証している。
- 7) 州に代わりその行政を行う単位
 - 8) 全ての子どもの教育を受ける権利を保証した法で、CECは本法成立のための唱道支援をしている。
 - 9) 障害別の教育者の組織は、1850年アメリカ聾者の教育者会議、1853年アメリカ盲者の教育者協会、1890年には後のアレクサンダー・グラハム・ベル聾と聴覚障害者協会などが設立されていた。
 - 10) Wald, D. L. 1935. “Education and the Arts.” *Journal of Exceptional Children* 1:3, *Windows on Henry Street* (1934) からの抜粋
 - 11) Ibid.
 - 12) <http://www.tc.columbia.edu/news.htm?articleID=8353&pub=7&issue=247>
 - 13) Wald, 1935. が “Education and the Arts.” の中で示している。
 - 14) ICEC. 1942. “The Present Outlook Yesterday.” *Journal of Exceptional Children* 8:8. pp. 261-264で示された1930年のICECフィラデルフィア総会でのフェレル会長スピーチ
 - 15) Ibid.
 - 16) <http://www.cec90.org/cecs-founding.html>
 - 17) Ibid., ICEC. 1942.
 - 18) Ibid.
 - 19) 希望者を募ると制御しきれなくなると考えたワーナーらは過去の失敗をもとに入念に7名選出しそのうち6名が実際に出席した。
 - 20) Dewey, J. 1904. “The Relation of Theory to Practice in Education.” *The Third yearbook of the National Society for the Scientific Study of Education*:1 この論文はデューイがコロンビア大学へ移る直前のシカゴ大学時代に書かれた。
- Kode, K. *Elizabeth Farrell and the History of Special Education*. Council for Exceptional Children. 2002. ISBN 0-86586-968-5.
- Phillips, C. H. 1935. “Elizabeth E. Farrell.” *Journal of Exceptional Children* 1:3. pp.73-76.
- Shulman, S. L. 1998. “Theory, Practice, and the Education of Professionals.” *The Elementary School Journal* 98:5. pp. 511-526.
- Warner, L. M. 1942. “Early History of the International Council for Exceptional Children.” *Journal of Exceptional Children* 8:8. pp. 244-247, 267-268.
- Warner, L. M. 1944. “Founders of the International Council for Exceptional Children.” *Journal of Exceptional Children* 10:8. pp. 217-223.
- Wooden, Z. H. 1980(a). “Growth of a Social Concept: An Overview.” *Exceptional Children* 47:1. pp. 40-46.
- Wooden, Z. H. 1980(b). “Foundation of the Council 1922-1924.” *Exceptional Children* 47:1 pp.47-55.

(指導教員 三宅なほみ教授)

引用・参考文献

- 倉石一郎 2012. 「ビジティン・ティーチャーの「訪問」からの部分的撤退はなぜ起こったのか—知的障害児教育とのかかわりをめぐる一考察—」『東京外国語大学論集ダウ85号, pp. 141-161.
- 佐藤学『教師花伝書—専門家として成長するために』小学館, 2009.
- 中村満紀男・田代みのり 1992. 「エリザベス・E.フェレルの特殊学級における精神薄弱と思想 (1900-1932)」『障害者問題史研究紀要』第35巻, pp. 27~40.
- 本間貴子・米田宏樹 2011. 「20世紀初頭ニューヨーク市固定式精神薄弱学級指導主事 E. フェレルによる生活活動体験を配列したカリキュラムの形成」『障害学研究』第35巻, pp. 79-93.
- 文部省『特殊教育百年小史』1978.
- リリアン・ウォルド 著, 阿部里美 訳『ヘンリー・ストリートの家: リリアン・ウォルド地域看護師の母自伝』日本看護協会出版, 2004.
- Geer, C. W. 1977. “The CEC Trees and Its Roots.” *Exceptional Children* 44:2. pp.82-89.
- Hendrick, G. I. & MacMillan, L. D. 1989. “Selecting Children for Special Education in New York City: William Maxwell, Elizabeth Farrell, and the Development of Ungraded classes, 1900-1920.” *The Journal of Special Education* 22:4. pp.395-417.